

富士見の歴史講座 第二回 平成25年6月8日(土) 10:00~12:00

「天狗党の乱」と「埼玉」

春日部市郷土資料館 学芸員 榎本 博氏

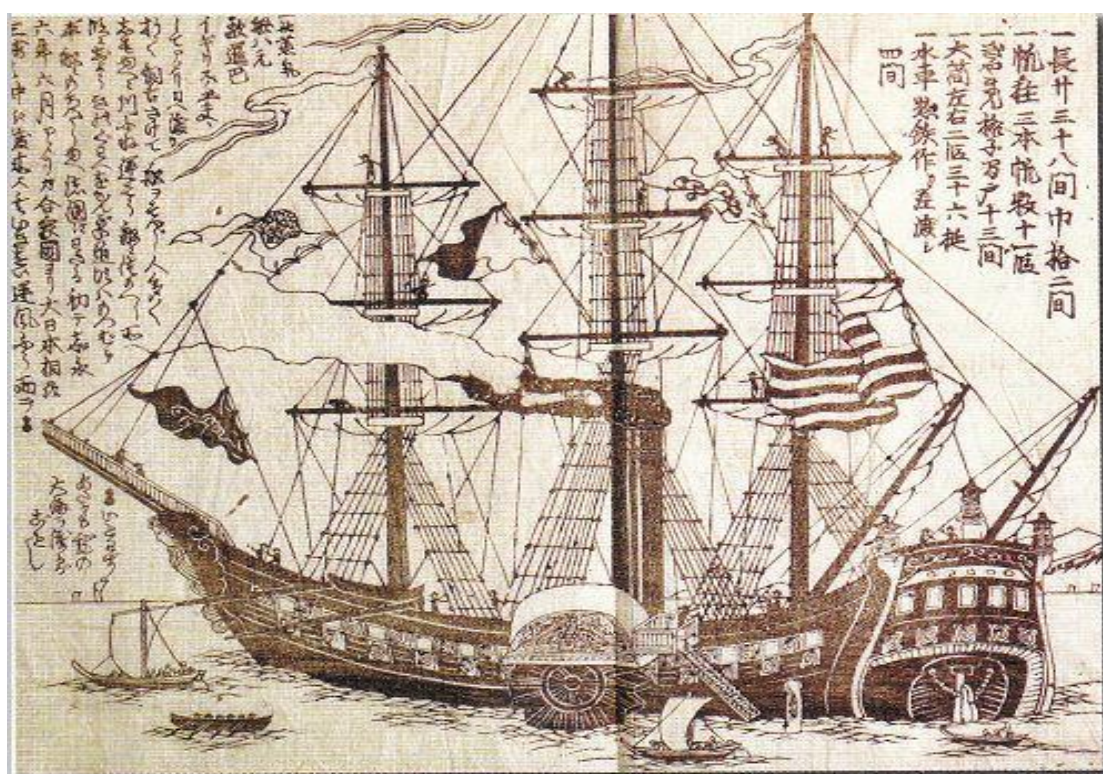
報告： H. S.

今回も、前回と同様に50名の受講生が「富士見の歴史講座」で勉強されました。歴史の好きな方々が多いのに驚かされます。

激動時代のヒーローにスポット・ライトを当てた講座ではないですが、ヒーローと同様に危機感に動かされた人々と庶民への影響など知り得て、「ホー！」「へー！」という感嘆の言葉が聞かれました。前回講義での質問では、川越藩・忍藩の三浦半島での警護費用は？誰が負担？・・・等であり、今回は質問ではないですが、天狗党の借金という強奪？負担、追討幕府への助郷などの強要負担などの数値を知りました。やはり歴史の転換期の影響は、場所により・人により計り知れないところがあるようです。



以下は、配布資料になくて、プロジェクターで説明された内容のものを、少し載せますので、講義を思い出してください。(春日部市郷土資料館 第43回 夏季展示 「幕末のかすかべ」より)



1 蒸気船図

永沼 増田 (豊) 家文書 402 埼玉県立文書館所蔵

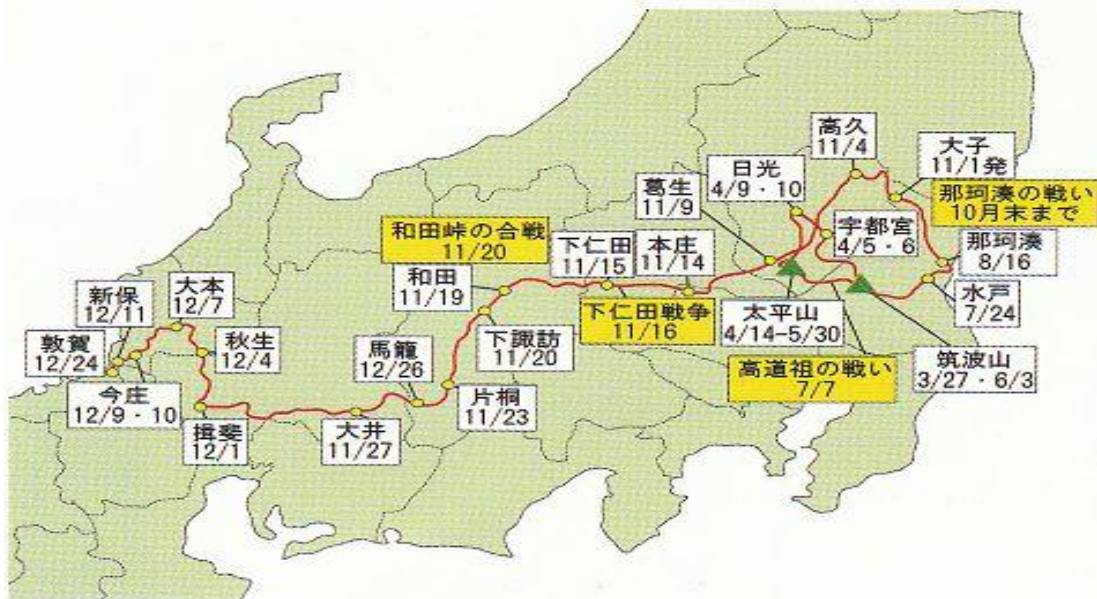


2 武州横濱於應接所饗応之図

永沼 増田 (豊) 家文書 401 埼玉県立文書館所蔵

袴 (かみしも) を着た武士が外国人を食事でもてなしているが、食べ物のおいを嫌がっている様子がみえる。

1 天狗党の進路 『幕末の上州』 を加筆修正して作成



天狗党は元治元年3月の挙兵から、11月までの約8ヶ月間、北関東地域を横断し、村・町に対して金銭・食糧・人馬を強要し、幕府軍と交戦、各地が戦場となった。那珂湊での幕府軍との交戦後、京都に滞在していた一橋慶喜を頼り、西上した。

2 関東における 天狗党軍用金徴収一覧

常陸国下妻町・筑波山周辺	900両
下野国宇都宮宿	210両
下総国匝瑳郡	40両
上野国桐生町周辺	5875両
常陸国真壁郡	45両
上野国藤岡町周辺	1800両
下野国安蘇郡	2370両
上野国下仁田町周辺	1745両
上野国渋川町周辺	4950両
上野国中之条周辺	350両
上野国伊勢崎周辺	4050両
武蔵国榛沢・幡羅郡	1575両
下総国西宝珠花	1800両
下総国野田町	3500両
常陸国府中宿	3500両
下野国塩谷郡安沢村	270両
下野国栃木宿	—両
下野国梁田・足利・都賀郡	3865両
下野国都賀郡	440両

※但、判明するもののみ

3 追討軍奉行田沼意尊の進路 『茨城県史近世編』より作成



1 粕壁宿を進行した警衛・追討軍

日時	主な人物(役職等)	装備	人数計
4月15日通過	高木宮内(目付)・河野伊予守(歩兵頭)ほか	大砲4挺・小銃390挺	1036
4月15日宿泊	秋田安房守(大名・陸奥三春藩主)	鉄砲80挺	355
6月13日宿泊	近藤登之助(寄合)		
6月17日*	市川三左衛門(水戸藩家老)ほか	大小砲80挺・弓80張	233
6月21日*	永見貞之丞(目付)・北條新太郎(歩兵頭)・小出順之助(目付)ほか	ゲベル銃600挺・大砲4挺	940
6月25日*	城織部(歩兵頭)	大砲4挺・小銃300挺	396
7月12日*	横田五郎三郎(歩兵頭)ほか	大砲3挺・小銃186挺	
7月14日*	間宮徳三郎(御持小筒差図役並)	御筒20挺・ピストル10挺など	
7月29・晦日 宿泊	神保山城守(大番頭)	ゲベル銃54挺・小筒29挺など	264
	土屋駒之丞(御先手頭)	ゲベル銃30挺ほか	86
	竹内日向守(小十人頭)	ゲベル銃55挺ほか	180
	牧野綱太郎(使番)		23
	遠山三郎右衛門(徒頭)		189
	織田伊賀守(書院番頭)	ボードホーキツル2挺・300目玉野戦銃131挺・手銃103挺	630
	井上越中守(小姓組番頭)	大砲2挺・小銃80挺	582
	田沼玄蕃頭(若年寄)		150
	平岡四郎兵衛(歩兵頭)		500
	松平左門(御持小筒頭)		182
多賀外記(列手組頭)		145	
股楽弾正(目付)		14	
日根野藤之助(使番)		14	
真野大式ほか1名(具役)		2	
田沢対馬守(作事奉行)		150	
8月3日*	大岡兵庫頭(大名・岩槻藩主)	具足57領・槍15筋・鉄砲15挺など	57

典拠：足立家文書(埼玉県立文書館寄託)45・46・47・48・49、『栃木県史史料編近世七』日時の*印は栗橋関所通過日時。

2 粕壁宿、追討軍の宿泊・行軍

元治元年(一八六四)六月、幕府は日光道中越谷宿に、岩槻藩主大岡忠恕(ただゆき)や代官木村重平を待機させ、逃亡する水戸浪人や金品の押借する者たちを取り締まりました(資料2)。

さらに七月、田沼意尊(おきたか)率いる幕府軍と市川三左衛門率いる諸生党の軍勢は、江戸から筑波山・那珂湊方面へ向かう途中、日光道中を通りました。田沼らは七月二十九・三十日に粕壁宿に宿泊しました。粕壁宿には、甲冑・陣羽織を身にまとった軍勢が、合わせて四・五千人泊まり、周辺の村々では、蚊帳(かや)・風呂桶・ふとんなどを調達したようです。

また、追討軍の行軍に伴い、幕府は各地で兵糧米を調達しました。市内の倉常村や粕壁宿では、米が買い上げられ、西宝珠花河岸から江戸川の舟運を利用して追討軍の駐屯する白河城下に廻漕されました。

このように、追討軍と警衛役人が滞在・通過したことにより、粕壁宿周辺は厳戒態勢が敷かれ、周辺の村人は追討軍の後援を担いました。

天狗党は、元治2年（1865）正月29日、越前敦賀において823名が降伏。慶応元年（1865）2月4日から処刑が決行された。

結果からすれば道半ばで、終わった事になりましたが、歴史の1コマとしてその動きが起こした世間へのインパクトは重量級であったようだ。

講師の方が結びで述べられたが、『郷土の歴史を知ることにより、現代の問題のヒント、地元の魅力など気付かせてくれる』という。前回と今回の講義はまさに、その通りである。次回も楽しみである。

4 風聞と幕末の政治・社会

天狗党には金品を押借され、追討軍には人馬・兵糧米を負担させられた地域の人々は、混乱する幕末の政治・社会をどのように見ていたのでしょうか。

各地には、天狗党の乱に関する風聞書が多く伝存されています。粕壁宿名主の家においても、那珂湊の戦争の絵図が伝えられています。地域住民は、天狗党の乱に関心を抱き、戦争の過程を見聞きしていたのです。なかには、幕府軍（官軍）を番付で評したものや、尊王攘夷派の水戸浪士を戯れ歌にして批判する内容も見られます。波山如幻説話と題される天狗党の乱の風聞書は、「波山（はざん）すなわち筑波山に挙兵した浪人たちは、「如幻（によげん）すなわち「幻のようだった」と評しています。

地域の人々は様々な情報の収集を通じ、時には戯言を交えながら、同時代の政治・社会を冷静に見つめ、新しい時代の幕開けを期待していたのではないのでしょうか。